

『麗莎的哀怨』から『衝出雲圍的月亮』まで
・その作品の形成と展開をめぐる・

小川利康

【 1 】

コトバこそが社会なのだ、ということ以前友人に語って失笑を買った事がある。友人にすら笑われてしまった事で私はすっかり元気を失ってしまったのだが、まだどこかで信じてみたい気分は残っている。その理由をここで述べたてる必要を特に認めないが、作家の紡ぎだす作品のなかに一筋の有機的連関を認めてよいとするなら、やはり、それは作家自身の持つコトバであろう。人は急には変わらない。コトバも同様であろう。それぞれが暗い過去だか、明るい過去だかは知らないが、やっぱり過去を背負って生きている。そして、「変わる」という事と「異なる」という事はまったく別々の代物である。「変わる」という言葉にはその変形の主体の存在が何れの形においても確認可能である事が暗黙の裡に前提されている。と、いった与駄はこの位にしておくとして、本題に入るとしようか。

ここで取り上げる作品は孰れも一九二〇年代後半に左翼作家蒋光慈によって書かれた中篇小説である。『麗莎的哀怨』は、一九二九年四月に脱稿し、雑誌「新流月報」〔一期～三期〕に中途まで連載され、同年八月、上海現代書局から単行本として出版された。もう一つの『衝出雲圍的月亮』も、同年十月十二日に脱稿し、翌三十年一月、北新書局から単行本として出版されている。この二つの小説を並べて論じようとするのには、幾つかの理由がある。第一に、この作品で扱われている題材（ストーリー）の類似〔何れも女性を主人公とし、そのヒロインの蹉跌を描く〕していながら、構成（プロット）に大きな変動が見られる事。第二に、時期が極めて接近している事〔蒋光慈の作家としての活動は僅かに六年余りだが中篇小説を年間二本書いたのは一九二七、二九年のみである。その上、前作『最後の微笑』から、内容の変化もさることながら、一年近くの空白がある〕第三に、この間、二九年八月下旬から十一月半ばまでの日本での生活しており、この療養／逃避生活と前後するこの二つの作品形成と大きな関わりがあること〔後述2・2〕。以上の点からこの作品を比較検討し、その「異なる」点から「変わ」った意味について考えてみたいと思う。

【 2 】

という訳で、ここではまず、前提の中味を吟味してみたい。第一の点については、本論【3】で細かく述べるとして、ここでは梗概を述べるにとどめ、第三の点について詳述したい。

〔1〕作品の梗概

『麗莎的哀怨』=物語はリサが梅毒にかかっていると語るところから始まる。革命が勃発する直前のパイゲンとの結婚を回想し、突然の革命政府の成立を呪いつつ、異国である上海へきてからの十年間の生活を語る。上海へ向かう途次に出会った伯爵夫人、上海での束の間の安逸、そして、リサも伯爵夫人も生活が窮迫し、裸体跳舞をせざるを得ないまでに零落する。やがて、中国当局により裸体跳舞が、禁じられて後は更に淫売へ転落していく。かくして、無産階級になり果てたりサは残された甘美な思い出を回想し、結婚初夜のこと、パイゲンとの出会い、女友達との恋のさやあて....また、映画を見ては貧しい大工イワンと結ばれていたら、と失われた過去の選択肢を想う。十年目の革命記念日には旧ロシア帝政支持のロシア人達が上海の領事館へデモに行くが射殺される者まで出る結末となる。伯爵夫人も信じていたアメリカ人に捨てられ、発狂し、知人のロシア人はアヘン売買で逮捕される。リサは革命に身を投じた姉のことを最後に語り、黄浦江に身を投げる決心をして、物語はおわる。

『衝出雲圍的月亮』=夜、曼英は暗がりを歩いていると、突然、泣き声がして幼い女の子が助けを求めてきた。明日にはどこかへ売られてしまう、と言うのだ。曼英は憐れんで

家へ連れてかえる。その子供、阿蓮は助けて貰えなかったら自分の体を鬻ぐ人間になる所であったと、礼を言う。その言葉に曼英の方が暗然とした。彼女はまさにその生業で生活しているのだ。阿蓮を寝かしつけても曼英は寝つけずにかつての事を想う。柳遇秋との恋、革命軍から脱落してから、上海に来るまでの事、淫売を始めた頃の事...やがて、夢の中にかつての戦友、ミスWが現れ、曼英を責めた。翌日出掛ける時も、学校へ教えに行くと偽って出掛ける。その頃、かつての同志で今なお革命活動に参加している李尚志と再会する。後日を約してわかれたが、すれちがいが度重なる。その度に李尚志は阿蓮に字を教え、メモを残して去って行く。ある日、盛り場で客をとった彼女は旅館でその男を改めて見て驚く。柳遇秋であった。遇秋は変節して国民党の役人になっていた。絶望した曼英は一層李尚志への思いを募らせるが、その曼英の体は病んでいた。梅毒であると思った彼女は李尚志に愛される資格がないと考え、自殺を決意する。自殺を決意して乗った列車で 新鮮な田野の風に触れた彼女は更生を決意し、上海で女工となる。病も曼英の勘違いと判明した。李尚志は女工を組織し、演説している曼英と出会い、二人はようやく結ばれた。その夜、空を見上げると、月が雲を衝いて輝きを放っていた。

〔2〕『麗莎的哀怨』から『衝出雲圍的月亮』までの間に何があったのか？

まず、簡単にこの頃の蒋光慈の身の上の動きを拾っておく。

- 1928年・6月 『最後の微笑』脱稿（太陽月刊に中途まで連載）
 - | 7月 「太陽月刊」停刊
 - | 9月 『最後の微笑』を上海現代書局から刊行
 - | 10月 「時代文芸」創刊（一期のみ）
 - (1) 12月 『愛的分野』訳了
 - | 1929年・1月 「海風周報」創刊
 - | 3月 「新流月報」創刊
 - | 4月 「新流月報」〔二期〕に「蒋光慈啓事」を発表。身体が悪く、編集から身をひくと述べる。
 - | 同月 十四日、『麗莎的哀怨』脱稿
 - | 5月 「海風周報」停刊
 - | 6月 『冬天的春笑』〔ロシアの短篇小説集〕を泰東書局から刊行
 - | 8月 『麗莎的哀怨』を上海現代書局から刊行
 - (2) ・ ・ 同月・党から警告処分を受ける。
 - | 同月・下旬頃、日本・東京へ
 - | 9月・五日、『一周間』訳了 / 日本のプロレタリア作家、藤枝丈夫と交際。
 - (3) / 太陽社東京支部をつくる。
 - | 10月 『衝出雲圍的月亮』脱稿 / 蔵原惟人と会う
 - | 11月 十五日、上海へ帰国。
- 《自作『蒋光慈年譜』より抜粋》

ここで、注目すべき点は三点ある。

(1) 小説の上での一年の空白期間 / ロシア文学の翻訳がその空白期になされている事この間に蒋光慈は何もしていないのでは無論ない。革命文学論争が本格化している中で「太陽月刊」が停刊に追い込まれた後、上記の年表からも明らかな通り、「時代文芸」や「海風周報」などの雑誌の刊行に尽力し、『麗莎的哀怨』の構想を練り、『愛的分野』の翻訳をしていたと考えられる。この二種の雑誌の内容を簡単に見ておく。何れも蒋光慈のものに限ってしめす。

「時代文芸」

- 一期) 新的露西(詩) 華維素 1928年10月1日
二期) 都霞(小説) 新俄謝寥也夫原作 華維素譯〔一期預告参照〕
(「新流月報」の一期・1929年3月1日に発表)

「海風周報」

- 一期) 革命後的俄羅斯文学名著(国外文壇消息)・魏克特 1929年1月1日
二期) 一周間(小説) 蘇俄里別丁斯基一著 ・魏克特譯 同年1月6日
三期) 同年1月13日
四期) 信(小説) 新俄謝芙林娜作 ・蒋光慈譯
烏籠室漫話 ・魏克特 同年1月20日
五期) 從故鄉帶來的消息 ・蒋光慈 同年1月27日
六、七期合刊) 致張資平君的公開信(通信) ・蒋光慈 同年2月10日
八期) 最後的老爺 蘇聯曹斯前柯著 ・蒋光慈譯 同年2月24日
九期) 最後的老爺 蘇聯曹斯前柯著 ・蒋光慈譯 同年3月3日
十期) 同年3月10日
十一期) 同年3月13日
十二期) 同年3月23日
十四、十五期) 同年4月21日
十六期) 獄囚(小説) 俄国弗尔曼諾夫作 ・華希理譯 同年4月28日
十七期) 同年5月25日

〔は外国文学の翻訳・紹介の文章 / はその他の文章〕

この表から明らかな事はこの時期にロシア文学の翻訳・紹介が集中的に行われている事である。以前になされた翻訳は極めて少なく発表されたものは詩六篇〔『新夢』〕論文三篇にすぎず、紹介としては瞿秋白との共著『俄羅斯文学』があるのみである。なお、この点をとらえて『麗莎的哀怨』の手法の独特さにこうしたロシア文学への造詣からくる自負心を指摘する論考〔佐治俊彦・和光大人文学紀要十六号「蒋光慈『麗莎的哀怨』の周辺」〕もある。

(2) 党との関係の悪化〔1929年8月 / 尚、1930年8月には党を脱退〕

この頃、蒋光慈は党から警告処分を受けている。〔“夏衍同志談蒋光慈”哈曉斯著『蒋光慈研究資料』所収〕理由は『麗莎的哀怨』が好ましからざる影響を生んだ事、並びに組織活動に参加しなかった事とされる。後の1930年8月には脱党届けを提出〔“關於蒋光慈党籍問題的一件史料”唐天然著「新文学史料」1983年四期・阿英の証言『浪迹于文壇芸海間』呉似鴻P239参照〕したという。同年10月20日には「紅旗日報」で除名が発表された。

(3) 日本への旅行(療養? 逃避?)

この突然の日本行が『麗莎的哀怨』に対する批判と無関係とする事は難しい。ただ、はっきりとそうに理由づけをするのは楊邨人の文章〔「太陽社與蒋光慈」『蒋光慈研究資料』所収〕くらいである。当時の『麗莎的哀怨』批判として残っているのは陽翰笙の文章〔「讀了馮憲章的文章以後」『蒋光慈研究資料』所収〕だが、これは1930年5月発表のもので、馮憲章の〔『麗莎的哀怨』與『衝出雲圍の月亮』〕ものに対しての反論である。『麗莎的哀怨』の批判と日本行とを直接結びつけるものとは言えない。さらに、この批判の後に紅旗日報で除名されるにあたり、紙上に党の見解が示されているが、時期的近さから考えてみても、むしろ『麗莎的哀怨』批判というよりも、当時の党の極左路線の中での

党員への自己批判、弾劾という性格の方が強い印象がある。例えば、紅旗日報には次のように述べる。

『「麗莎的哀怨」は全くプチブル意識から出発し、白ロシア人を分析し、白ロシア人の悲哀を反映したもので～読者に与える印象は白ロシア人の革命に反対した後の悲哀に同情するもので、白ロシア人に代わって苦しみを訴え、ソビエトプロレタリアートの統治を蔑視するものだ。』（紅旗日報・上掲書）

また、陽翰笙はその文章のなかで、「確かにロシア貴族は零落したが、光慈の感情のあり様を通して（原文・経過光慈の感情的組織～）表現された貴族の零落は寧ろどれほどか人を同情させ、共鳴させることか」と述べて、「今、我々は決然として公に自己批判を行うべき時なのだ」と結論する。

蔣光慈の階級意識を問題にし、白ロシア人に同情していると決めつける点で、言葉の硬軟の違いはあれ、共通した見方を持っている。つまり、作品批判としての重圧というよりこの当時の一般的な政治情勢から鑑みて、前掲の佐治論文の中でも指摘されている蔣光慈の「直接政治に参加しないことによって時代を創造する工作の一部を担う文学工作者認識」に対しての重圧というべきであろう。

無論、事実関係についてはこれ以上詳論したところで何の実りもないだろう。なぜなら二十九年当時の批判の実体を明らかにする材料がこれ以上ない上、その材料が他にないと断定できないからである。

以上の事柄から推測できることは(1)この時期にロシア文学の本格的受容が行われ、作風に何らかの影響を与えた。(2)当時の党の極左路線が蔣光慈を圧迫し、作品にも一定の影響をもたらした、の二つである。

【 3 】

ここでは作品の内容について具体的に論じてゆくことにする。

小説はある仮設された事実に基づき語られる。それはある意図に基づくが故に、事の次第を時としては顛倒させて語ることもある。例えば、推理小説のように。そして、顛倒された事実はその意味あいとその顛倒の形によって変貌させられる。ここでも、『麗莎的哀怨』が零落する女の物がたりであるのに対し、『衝出雲圍的月亮』は再生する女の物がたりとなっている。この二つの小説はいずれも、次のような因果関係に支えられている。

愛する男性の選択の誤り

蹉跌・淫売

梅毒（絶望）

自殺〔再生〕

『麗莎的哀怨』

白根への絶望
伊万へ追想

ロシアから
逃亡・貧窮

ロシアに帰る
希望を失う

黄浦江へ投身
自殺を決意

『衝出雲圍的月亮』

柳遇秋への失望
李尚志への恋慕

大革命の失敗
・絶望

尚志に愛される
希望を失う

自殺を決意す
るが思い直す

このように、類似した作品であるにも係わらず、結末が正反対である主な原因はそのプロットにあると思われる。小説が畢竟一つの思念の産物である以上、その中で語られる内容は結局のところ語り手の記憶でしかない。更に言えば、語り手によってすでに色付けされた符号でしかない。ここで時間やら何やらで分けるとするのは極めて便宜的な方法でしかないのだ。ただし、記憶と記憶を繋ぐ何かの小説を作り上げている事を避けて通れない

からにはそれを突き止めるなんらかの方法が必要である。それはなにか。ここで一つの試みとしてエピソードという形で一旦小説を解体してみる。無論、恣意性は免れないが、ある程度の長さで纏まりを持った幾つかのパラグラフにそれぞれ分けてみるのだ。その大きなものが章立てであることは当然だが、それを更に幾つかにわけたのが以下の図だ。これは、独白型の小説には向いているが、『衝出雲圍の月亮』のような三人称の小説には適用しにくい。やはり、時間の流れによって小説の展開が支配されているからだ。逆にいえば、一人称の独白型の小説は語り手の思念によって小説の展開が支配されていると言ってよい。勿論、三人称の小説においても、表面に出てこない陰の語り手の作者の思念によって支配されているわけだがそこを作者という語り手は時間という匱の真実らしげな、現実に沿って小説を支配して読み手を騙るのである。*エピソードとは、ここでは一つの場が想定され、時間的・空間的に独立したものを言うものとする。つまり、所謂回想については単に前後のエピソードに付帯して語られるものについては独立したエピソードとして認めていない。

『麗莎的哀怨』

一章

プロローグ

〔梅毒に罹った嘆き〕 回顧〔ボルシェビキ達、零落する自分達ロシア貴族のこと〕

二章

革命の到来

〔新婚一カ月の甘い夢・将来の夢〕
〔思いがけない革命の到来〕
〔イルクーツクでの逃亡生活〕

三章

革命の進行

〔ウラジオストクでの生活〕
* 日本軍の撤退

四章

ロシア出国前夜から乗船まで

〔夫・バイゲンとの抱擁〕
〔結婚初夜のこと〕
〔上海行ききの船に・伯爵夫人と会う〕

五章

上海での生活

〔上海の事物への好奇心〕
〔赤露敗北の期待から失望・夫の憔悴〕
〔伯爵夫人との毎日〕

* は前項に従属するものを言う。
下線を付した個所は回想と判断した

六章

窮乏生活の始まり

〔夫の無能ぶり〕
〔職探しに奔走〕
〔伯爵夫人と共に裸体跳舞へ〕

『衝出雲圍の月亮』

一章

阿蓮との出会い

〔上海の夜・幼女とあう〕
〔幼女阿蓮の身の上話〕
* 曼英の自責

二章

曼英の過去の回想

〔柳遇秋に招かれてH鎮の軍事政治学校に入学〕
〔柳遇秋との恋愛〕

三章

曼英の過去の回想

〔H鎮の反動化〕
〔曼英の日記 H鎮からの南征ミスWの死亡〕
〔S鎮へ逃亡・陳洪運との出会い〕
* 陳を騙して金を貰い上海へ

四章

曼英の過去の回想

〔上海での生活〕
〔かつての戦友とあう〕
〔生活に困窮〕
〔買弁階級の息子を相手に売春〕

五章

曼英の過去の回想

〔売春の生活〕
〔夢の中でミスWが売春生活を責める〕

六章

李尚志との再会

〔昨晚会うはずの買弁の息子に会って、寝ると夢でミスWに会い責められる〕
〔翌朝帰り道で李尚志と再会〕

| | | |
|-----|---|---|
| 七章 | 裸体跳舞へ 〔初めての裸体跳舞〕 〔裸体跳舞禁止となる〕 | 〔その後、李尚志と会えず〕 待つこと四回目に会えて、家へ伴い、 阿蓮と引き合わせる〕 |
| 八章 | 売春婦に 〔初めての客引き〕 〔結婚蜜月の頃の事・情人と駆け落ち した或る軍人の妻の事〕 | 七章 柳遇秋との再会 〔客としての柳遇秋との再会〕 〔一夜明けて帰宅すると李尚志の書き置 きを見つける〕 |
| 九章 | 売春婦の生活 〔ダンスホールでのリサの奪い合い〕 〔夫・バイゲンをめぐり友人と恋のさ やあてをした少女時代〕 | 八章 柳遇秋と李尚志の狭間での苦悩 〔李尚志に会えず、以前会った場所へゆ くと常連の客に会い、伴われて宴会へ〕 〔宴会のホテルで柳遇秋に会い、引き止 められる〕 〔帰宅すると李尚志の住所を見つける〕 |
| 十章 | 少女時代の思い出 〔大工イワンのこと〕*夫との比較 〔二年前、中国で見た“ヴォルガの川渡 し”のこと〕 | 九章 李尚志の家を訪問 〔李尚志と会うが、自分が売春婦である ことが言えない〕 |
| 十一章 | ロシア領事館の事 〔一年前の赤露の領事館で白露の青年が 殺された事〕 〔十年前にイルクーツクにいた頃〕 | 十章 発病 〔国民党の幹部に嫁いだ女友達に会う〕 〔帰宅すると発熱し、寝込む〕 *梅毒に罹ったと思う 〔尚志に全てを打ち明けに行くが途中で 断念。帰途で陳洪運に会い抱かれる〕 |
| 十二章 | 伯爵夫人と美国人との事 〔四ヵ月前からの美国人との同居〕 〔最近、美国人に捨てられ、発狂〕 *私はショックで発熱 〔知人がアヘン売買で捕まる〕 | 十一章 自殺の決意 〔尚志に会い、阿蓮を預ける〕 〔曼英の日記・自殺を決意〕 〔自殺のために列車にのり、田野の風に 触れ再生を決意〕 |
| 十三章 | エピローグ した姉・ウエーナが夢で私を責める〕 〔明日、自殺の決意〕 | 尚志の視点 〔演説している女工が曼英であるのに 気づく。二人はかくて再会を果たし 結ばれる。〕 |

以上の表から以下の事が言えよう。(1)『麗莎的哀怨』において採用されている手法はモノローグの回想であり、既定の改変不能の事実として設定されている。そのうえに、重層的に更に過去の記憶へと遡及しておりそうしたエピソードの軸となっているのは幸福〔=過去〕不幸〔=不幸〕という図式である。(2)『衝出雲圍的月亮』においては回想を前半部に採用し、後半が現在の時制に沿って進行するため、改変可能な事実として設定されている。前半の過去の記憶は既定の改変不可能な事実ゆえに改変可能な現在の事実へ影響力を持ち、曼英の行動を支配する。なぜなら、作中的人格であれ記憶からヒトは逃れられぬから。

この二点から、この二篇の小説は極めて似た因果関係を内包しながらも、結末が異なるのは回想の手法の用い方が異なるからといえる。これは極左的路線をとっていた当時の情

勢の中で党员作家であった蒋光慈の奏でた同工異曲といえよう。さらに、完成度から言えば、『麗莎的哀怨』の方が上回る。というのも『衝出雲圍的月亮』では、図表にも特記したように、主人公の曼英が再生して女工となる場面では曼英の視点を捨て、この箇所だけ李尚志の視点を採用しているからである。これでは曼英の再生の過程の最も重要な個所を欠いてしまう。蒋光慈の東京での日記『異邦と故国』での次の記述はそうした事情を説明していると思われる。

「長篇小説として十二万字にはなろうが、私は十万字ぐらいに縮めようと思う。いまの中国の読者には長篇を読む時間もないし、大部の本を買う能力もない。やはり私は自分の本を短くしよう。短くしてもこの小説の構成を損ないはすまい。」〔10月7日〕

〔了〕